

東京都立小岩高等学校（1年目）

【校長】 長野 泰明 【生徒数】 1063名 【学級数】 27学級



次の取組へ

【課題・改善】

○授業（体育科）での取組

- ・ICTの録画面面を増やすと生徒の運動場面が減る。ICT活用とスキルアップのグループを指定にする等の工夫をして運動量を減らさずICT活用を模索する
- ・録画した画像を Teams 配信して、自宅で確認、練習に繋げる場面設定をする。

○特別活動の充実と連携を図った取組

- ・Forms 提出した課題を確認させ、それを宣言させ練習する。また、普段の日常生活で工夫すべきことも記入させる

目標

- ・ICTの活用により、できなかったことができた喜びを体感できた生徒の増大（80%以上） ➡78%
- ・普段の日常生活において体力や運動技能の向上に向けた取組する生徒の向上（80%以上） ➡67%

結果

【成果】

○授業（体育科）での取組

- ・単元前アンケートおよび試しの授業での適切なグループ分けを行いICTの活用で「わかる」=「できる」体感場面が増大。
- ・目指す具体の姿をICTで視覚的に示すことと自らの姿を録画確認することで、コツを意識した生徒主体の学びが増えた。
- ・授業でできたことと課題を Forms 提出に変更。紙提出時より具体的記入が増えた。

○特別活動の充実と連携を図った取組

- ・体育祭やマラソン大会での運動部対抗を取り入れた結果、体育行事前の授業や練習で競いあいや生徒自らが体力や運動技能を高める工夫する場面が増えた。

【実態・課題】

- ・本校では運動部に所属して体育の授業に積極的に参加する生徒が多数存在する一方、運動が苦手な生徒も一定数いる。
- ・運動が得意な生徒はうまくできながら、その運動技能がうまく説明できない。また、運動が苦手な生徒は運動技能の手立てがわかっていながら、その運動技能が習得できていない実態がある。

⇒「わかる」⇔「できる」目指した授業
⇒ICTの活用により、できたを体感できる生徒の増大。

【取組】

○授業（体育科）での取組

- ・体育の授業を受講する生徒の体力、運動技能をアンケートや試しの授業で正しく把握して、適切なグループ分けをする。
- ・ICTを活用して、目指す生徒の姿を視覚的に示し、更にICTでの録画でできていることとできていないことを明確にして、生徒主体の工夫を引き出す。
- ・授業でできたことや次にすべきことの具体例を Forms で提出させる。

○特別活動の充実と連携を図った取組

- ・体育祭、マラソン大会等の体育的行事の前に授業での事前練習や朝練習を奨励して、日常生活における体力や運動技能の工夫を自らできる生徒を育成する。

【取組（詳細）】

○保健体育科における1人1台端末の活用

- ①模範となるバドミントンのダブルスの動きのトップ&バック、サイドバイサイドをプロジェクターで確認してから練習を開始した。
- ②上げた時はサイドバイサイド。攻めた時はトップ&バックのローテーションができていないかを互いに録画した。
- ③録画を見て、「相手が打ってから動いているのがわかった。」「上げた、打つよと互いに声を掛け合い、スムーズにローテーションを行えるようにする」と改善点の記入がみられた。



ペアの動きを交代で録画します

○「わかる」⇔「できる」を目指した授業



サーブの苦手な生徒へ教えあい場面

- ①サーブの苦手な生徒にバドミントン部の生徒が身体の動かし方を「こんな感じ」と具体的に説明しようとしていました。
- ②教わる生徒が「ラケットを持つ手の肘をたたんで、シャトルが面の真ん中で当たるか確認してから打つ感じかな」と言葉で確認がありました。
- ③感覚的にできてしまっていた生徒も言葉で説明されて、「できる」⇒「わかる」を体感しました。サーブが苦手な生徒は「わかる」⇒「できる」になりました。

○特別活動の充実と連携を図った取組



体育祭2週間前から朝練習



3学期持久走の授業6回



マラソン大会で成果発揮

体育祭の2週間前より7:30~8:00まで各学年種目の練習を通じて、クラスの仲間と一緒に身体を動かす楽しさをたくさん体感させました。また、3学期のマラソン大会前の持久走の授業では、毎回のタイムと自ら改善すべきことをFormsに記入させ提出させたところ、改善点を意識した走りとなり、ほとんどの生徒が走るたびに記録の向上が見られました。また、マラソン大会で部活動対抗を取り入れた結果、マラソン大会前の各部活動練習が持久力向上のメニューとなり、マラソン大会で部活動での競い合いが見られました。